

石坂洋次郎(いしざか・ようじろう)☆常設展示作家

1、石坂洋次郎の生涯

<生涯1 津軽・城下町と少年> 0歳～18歳 1900～1918

「物は乏しいが、空は青く、雪は白く、林檎は赤く、女達は美しい国、それが津軽だ。私の日々はそこで過され、私の夢はそこで育まれた。」と後年語る洋次郎は、明治33年、父石坂忠次郎、母トメの二男として、弘前市に生まれる。

小学校時代、病氣ばかりしている虚弱の児童で、本を読むことを好んだ。子供で読めるものは手当たり次第何でも貪り読み、昂じて小学校5、6年の頃、友人とコンニャク版で雑誌を作っている。

県立弘前中学校では学年が進むにつれて席次は下がっていったが、懸賞俳句の選外秀逸に採られたり、「少年」の懸賞「お伽千字文」に八郎潟と岩木山の伝説を綴った「山と湖」が入賞するなど、後年の作家としての素地が窺われる。

<生涯2 学生生活と創作> 19歳～24歳 1919～1924

大正7年、弘前中学校卒業。両親の希望により慶応義塾大学を受験したが失敗。1年間東京の予備校に通い、8年慶応義塾大学文学部予科に入学する。

大正10年、半年前に帰省中弘前で知り合った今井うらと結婚。洋次郎21歳、うら17歳であった。

結婚後も授業に出席せず、家か図書館での読書生活の毎日である。

この間、同級生等と同人雑誌を出し、小説を載せる一方、大正12年、同郷の先輩作家葛西善蔵に会うため鎌倉に向かう。以後葛西善蔵を尊敬し、引かれながらも、無法無惨な破滅型の善蔵からの遁走を考える。

<生涯3 地方教師生活と文学> 25歳～32歳 1925～1932

早すぎる学生結婚は長男、長女の誕生を加え、まず経済的基盤を確立することが第一となる。

大正14年、郷里に帰り県立弘前高等女学校に就職。翌年、秋田県立横手高等女学校に転任した。地方での教師生活を、当時洋次郎は都落ちと考えていた。誰ひとりとして対等に文学を語る友のない環境にやるせない思いを味わう。

昭和2年、処女作「海をみに行く」を「三田文学」に発表する。以来、地方にあって作品を途絶えることなく同雑誌に発表する。この間結婚生活が安定を欠き、公私ともに行き詰まりの状態となる。

＜生涯4 作家への道＞ 33歳～45歳 1933～1945

昭和8年、「三田文学」に「若い人」を発表し、大好評を博した。以後5年間、同誌に断続的に連載する。続いて、「金魚」「風俗」「お山」をあらわしていく。

11年「若い人」により第一回三田文学賞を受賞した。また、妻の起こした事件を下地として「麦死なず」を書いた。「若い人」とこの作品により作家としての地位が確立した。

『若い人』が刊行されると一躍ベストセラーとなり、映画化された。13年、不起訴となったが「若い人」が右翼関係から不敬罪などで告訴され、これを契機に14年に渡る教師生活にピリオドをうち、退職した。

14年「何処へ」などを発表した。戦争のため自由にものを書くことは難しくなっていた。

＜生涯5 青春文学の数々＞ 46歳～86歳 1946～1986

22年「朝日新聞」に「青い山脈」を連載した。初めての新聞小説で、好評のうちに終わり、単行本もよく売れた。今井正監督の映画「青い山脈」も多くの観客を動員した。一方、郷里に取材した作品は『石中先生行状記』などにまとめられていった。

その後は『丘は花ざかり』『陽のあたる坂道』『あいつと私』『光る海』『颱風とざくろ』などを精力的に書き著した。これらの多くは次々と映画化された。

41年「健全な常識に立ち明快な作品を書き続けた功績」により第14回菊池寛賞が授賞された。翌年から直木賞選考委員となった。49年には弘前市に、51年には横手市に文学碑が建立された。61年10月7日伊東市において86歳で没した。

2、石坂洋次郎の代表作

○『若い人』

北国の港町にあるミッションスクール。青年教師間崎慎太郎は、5年 B 組江波恵子の作文に「烈しい衝動に打たれた」。早熟で頹廢的な少女の危険な運命を予告する、怪しい魅力を放った苛烈な告白であった。

一方同僚に同期に赴任した若い女教師「洗練された容姿と進歩的な思想」の持ち主橋本先生がいる。間崎はこの健康な女と病める魂をもつ少女との間で、自分ではリベラルな中庸主義と信じ込んでいる自己欺瞞に、事ある毎に振り回される。いつでも急転直下の行動は二人の女性からなされる。間崎はそれらに押し出されるように単に結果を受けとめるだけである。

特異な生活環境、危うい感受性ではあっても、美貌の女生徒恵子に、逆に読者は心の純粹さ、とらわれることのない一途さを感じずにはいられないであろう。魂の渴望が、肉体をとりこみ、さらに肉体そのものを越えていく強靱さを持ち得た恵子は、時代を経てなお新鮮である。

○『麦死なず』

急速に勢力を持ち出した流行の思想は、台風にも似て、その中に巻き込まれる生身の人間は途方にくれ、なす術を知らない。

主人公五十嵐も妻ともどもこの台風に巻き込まれる。五十嵐自身は、思想についていけないという自信のなさから、妻は思想の実践という形で。それは結婚生活の崩壊を意味する。妻アキが思想家牧野への思いを絶ち切れず3人の子供まで置いて家出、妊娠までしている。ふつうであれば離婚だが、戻って来たアキを五十嵐は受け容れる。

作者自身、結婚生活の倦怠期ゆえに、脆弱な部分が危険にさらされたとし、「そのころ、私はこの作品を書かなければ生きていく力が見出せないほど、私生活の上で追いつめられていたのである。」と述べている。切羽詰まり、まだ傷の癒えぬ時に、一方で「若い人」の第1回を書き、「とにかく崩れるもの、そういうものの美しさを描きたかった」とする作家の心も頷けよう。

○『青い山脈』

「青い山脈」とは、早暁の県境の青い山脈のことである。遥かなる山脈、越えた向こうに希望に満ちた何かがあるにちがいないと思わせる青い山脈。

終戦後の日本人は、生き方の指針をつかみきれずにいた。若者然り。大人然り。若者にあっては学園内で。大人の世界にあっては、時代についていけない両親の家で。女学生新子と高等学校生六助は、それぞれの場で陰湿な嫉妬や低俗な封建制、大人達の失意に立ち向かい現状を打開してゆく。

からりと澄んだ明るさ、健やかさや、真正面から立ち向かう正義感、誠実さが、戦後の混迷期の国民に大いに迎えられた要因である。

若い人達の活躍が、明日への希望を信じさせ、校医と進歩的な英語の女教師の結婚もまた明るい未来を感じさせる。同題で映画化もされ、主題歌は今も歌われ、その歌の瑞々しさは、容易にすたれない魅力を持っている。

○『石中先生行状記』

昭和 23 年1月号から 29 年6月号まで「小説新潮」に連載。この間、短編として他の雑誌に発表された作品も4、5編のちに刊行の際加えられる。40 編近い読み切り物語が主人公石中先生を中心に展開される。『青い山脈』に次ぐ長編小説である。

「作者がキセルに巻煙草のちぎったのをさしこんでスパスパやりながら、土くさくなつかしい郷土の人情、風俗をスケッチした大人向きの作品であると言い得よう」「『津軽風流譚』というサブタイトルのついた作品も5編ほど混じっているが、これは小西茂也氏の訳したバルザックの『風流滑稽譚』をたいへん面白く読んだのが動機で、私も書いてみる気になった」と作者は作品の成立を述べている。

郷土津軽の土俗的な、野太い、原始的日向の人間臭さといったものが、作家の暖かい目を通して、ユーモラスに描かれている。石坂文学の持ち味の一つと言えよう。

3、石坂洋次郎のキーワード

<キーワード1 何か時機を見て遁走しなければ>

大正 12 年7月、同郷の先輩作家葛西善蔵を鎌倉建長寺内塔頭宝珠院に訪ねた。洋次郎慶応大学国文科2年生。同郷というだけでなく、善蔵の作風は洋次郎の嗜好とも合っていた。

折しもこの日は、有島武郎情死事件が新聞に報道された。善蔵の部屋も新聞が広げられたままであった。このような外的条件ばかりでなく、対面そのものも洋次郎の度肝を抜くものであった。「一種の溺愛に近いもの」を感じながらも、ひ弱い文学青年洋次郎は恐れ、おののき、とまどい、「いつか時期をみて遁走しなければならぬ」と初対面の日から心の片隅で決意する。

「破滅型」を避ける「良識・常識」は地方で教員生活をしながら作品を雑誌に発表し続けた粘り強さによって開花し、文学を志す人間だけでなく、日常生活やそれを営む人々もまた「磨き次第でいくらでも立派なもの」になると確信するにいたる。そうしてこれがのちの石坂文学の基盤となった。

<キーワード2 青い山脈>

昭和 22 年6月、洋次郎最初の新聞小説「青い山脈」を「朝日新聞」に連載。戦後間もなくの混迷の時期にあった時、「青い山脈」は健康的な明るさや、解放感が共感を呼んで、ベストセラーとなり、映画化された。同名の主題歌は今も歌われ、歌詞も瑞々しい。

この作品は、作者の言う「人間の古い習俗から開放されていく過程を描いた」「地方の高等女学校に起こった新旧思想の対立を主題にして、民主的な生活の在り方を描いてみようと思った」にもある通り、当時の多くの日本人の、ポツカリ心に穴があき、何かを求めながらも何を求めてよいのやら分からない状態に水のしみわたるように受け容れられた。

この作品の明るさ、健康さは石坂文学の特色の一つでもある。

<キーワード3 人肌の臭いがする風景>

対談で「私は、作品を書く場合に、自分が目をつぶっておっても、手さぐりでももののありかがわかるという状態でないと、物が書けない。……したがって、私の書くものは、景色でいえば自分の生まれた郷里、13 年間住んでいた秋田県の横手市、それから現在住んでいる東京の田園調布、ここらの景色でしたら目をつぶっておってもわかるわけです。」と語っている。

目をつぶっても分かる郷里、「人肌の臭いがする風景」を『石中先生行状記』として昭和 22 年～28 年にわたって発表。「人生の経験を多少積んだ大人の目で、生まれ育った郷里の風土や習俗を見直して書き上げた。……土くさくなつかしい

郷土の人生、風俗をスケッチした大人向きの作品集」と洋次郎自身自負した作品である。

4、石坂洋次郎のゆかりの場所

①生まれ育った地（弘前市）

作家石坂洋次郎を育てた津軽の中心弘前は、弘前城を中心に四季の折り目正しい、落ちついた城下町である。この城址は葛西善蔵との交渉を書いた「金魚」にも登場。また岩木山を始めとし、津軽地方一帯は『草を刈る娘』『石中先生行状記』等の舞台ともなっている。

②13年間教員生活の地（横手市）

大正15年8月横手高等女学校の教師として着任。そこから洋次郎の横手時代が始まる。横手と関わりのある作品は『山と川のある町』『麦死なず』『何処へ』等である。

特に『山と川のある町』の山と川は鳥海山と横手川をさす。

市は洋次郎を文化功労者として表彰。また石坂洋次郎文学記念館がある。

③上京以来20余年住みつけた地（田園調布）

昭和13年教員生活を依願退職後翌年3月、一家上京。作家生活に入る。

ここで「青春もの」が書かれてゆく。『陽のあたる坂道』は、典型的な郊外住宅地としての田園調布周辺が大いに取り入れられている。多摩川沿いや都立大から駒沢大にかけての地域は、作品をクライマックスへと盛り上げている。

5、石坂洋次郎の関連人物

☆葛西善蔵(かさい・ぜんぞう):同郷先輩作家

大正 12 年7月、同郷の先輩作家葛西善蔵を鎌倉建長寺内塔頭の一つである宝珠院に訪ねる。折りしも有島武郎の心中事件が記事となった日で、善蔵が座っていた万年床の周辺には新聞が大きく広げられていた。善蔵 37 歳。洋次郎慶応大学国文科2年生。これが初対面である。

善蔵の作風は洋次郎の嗜好と合致し、暗唱できるほど繰り返し読んだ。いつしか「一種の溺愛に近いもの」を感じていたが、この初対面は強烈なものであった。以後、善蔵との交際は昭和3年7月の善蔵の死まで続く。

この間、何度も困らされ、この無法無惨な先輩の影響からいつか「遁走しなければならぬ」と考える。大正 14 年善蔵の「老婆」は洋次郎の代作である。善蔵を扱った作品に「金魚」がある。

☆水上瀧太郎(みなかみ・たきたろう):三田文学主宰

大正 15 年4月、水上瀧太郎を中心に「三田文学」復刊。本科生の時書き上げた「海をみに行く」の原稿が2年後実質の主催者である水上瀧太郎に渡し掲載される。

以後「三田文学」に作品を出し続ける。また瀧太郎の推薦で他の一般雑誌にも初めて発表するなど、洋次郎は地方にありながら彼に励まされ、育てられたといえよう。

葛西善蔵の作風に引かれながらも、その破滅型に対して「おそれ、おののき、とまどい」洋次郎は、遁走を決意する。

これが洋次郎の文学を方向づけることにもなるのだが、後年、瀧太郎の人と文学に共感し、家庭や周囲を犠牲にしてやまない破滅ではなく、彼に学んで「良識と常識」の文学を形成していく。それが多くの国民に愛読された。

☆北村小松(きたむら・こまつ):友人

大正8年、洋次郎は両親の反対を押し切って慶応大学文学部予科に入学。同じクラスに八戸町(現八戸市)出身の北村小松がいた。

彼は当時の洋次郎の印象を「髪の毛美しく、身だしなみのよい美少年。無口でマンドリンを弾いて、遊び半分に文科に籍を置いている」ととらえていた。

大正 13 年、洋次郎より1年早く卒業、世帯を持っていた小松が、兵役のため帰省すると、その家を借りて、洋次郎は郷里の妻子を迎えている。この時代は「海をみに行く」に書かれている。

また後年、洋次郎の住んでいた田園調布付近、洗足池畔に小松邸があり、同県人で親友の間柄でもあったので、友情溢れた小松追悼文を書いている。

6、石坂洋次郎の資料紹介

○柿ひとつ空の遠きに堪へむとす

書画(色紙)

272 mm × 241 mm

「柿ひとつ空の遠きに堪へむとす」この俳句は、教師生活 14 年を捨てて、作家として地歩を踏む不安と決意を表したもの。

エッセイ「依願退職」(「中央公論」昭和 14 年 1 月)の末尾に付した俳句。

○生甲斐や雪は山ほど積りけり

書画(色紙)

240 mm × 270 mm

「生甲斐や雪は山ほど積りけり 洋次郎」。墨書の俳句は珍しい。

○颱風や柘榴に似たる唇思ふ

書画(短冊)

360 mm × 58 mm

「颱風や柘榴に似たる唇思ふ 洋次郎」墨書で珍しい。

○「マヨンの煙」

原稿

1943(昭和 18)年頃

265 mm × 375 mm(× 88 枚)

昭和 17 年 3 月 1 日から 3 月 9 日までの原稿。石坂洋次郎は、陸軍報道班員として太平洋戦争開戦直後のフィリピンに従軍している。その際の 17 年 2 月 17 日からの記録は、「主婦之友」に「マヨンの煙」として連載されたが、原稿は未発表部分。

○「続石中先生行状記無銭旅行の巻」

原稿

1950(昭和 25)年

250 mm × 365 mm(× 64 枚)

「続石中先生行状記」は昭和 25 年 1 月から 12 月まで「小説新潮」に連載されたもの。『石中先生行状記』第三部所収。

7、石坂洋次郎年譜

1900(明治 33)年…7月 25 日(戸籍届上)青森県弘前市代官町に生まれる。父石坂忠次郎、母トメの二男。

1907(明治 40)年…4月、弘前市立朝陽小学校に入学。

1913(大正 2)年…4月、県立弘前中学校(現在の弘前高校)に入学。

1918(大正 7)年…3月、弘前中学校を卒業。慶応義塾大学理財科(現在の経済学部)を受験したが失敗。1年間東京神田の正則予備校に通う。

1919(大正 8)年…4月、慶応義塾大学文学部予科に入学。同級生に八戸出身の北村小松がいた。ワグネル・ソサエティに入部、のちにマンドリンクラブに転じる。

1921(大正 10)年…4月、文学部仏文科に進学。翌年国文科に移籍。11月 11日、同郷の今井うらと結婚。

1923(大正 12)年…4月、長男信一誕生。7月、同郷の葛西善蔵を鎌倉建長寺内宝珠院に訪ね、以来昭和 3 年 7 月、善蔵の死まで交渉があった。

1925(大正 14)年…3月、慶応義塾大学文学部国文科卒業。5月、処女作「海をみに行く」完稿。2年後に発表。7月、青森県立弘前高等女学校(現在の弘前中央高校)に勤務。8月、長女広子誕生。

1926(大正 15/昭和元)年…9月、秋田県立横手高等女学校(現在の横手城南高校)に転任。

1927(昭和 2)年…8月、二女朝子誕生。

- 1928(昭和3)年…5月、「キャンベル夫人訪問記」を「三田文学」に発表。
- 1929(昭和4)年…4月、県立横手中学校(現在の横手高校)に転任。10月、三女路易子誕生。一般雑誌に発表した最初の作品「外交員」を「文藝春秋」に発表。
- 1931(昭和6)年…7月、二女朝子、脊椎カリエスにて死去。
- 1932(昭和7)年…就職運動のため上京。諸種の困難があり、妻子を一時郷里に帰し、単身横手町に下宿。「金魚」や「若い人」の第1回分を書く。父忠次郎没。
- 1936(昭和11)年…「若い人」により第1回三田文学賞受賞。8月、「麦死なず」480枚を「文芸」に一挙に掲載。この2作で作家としての地位を確立。
- 1937(昭和12)年…『若い人』がベストセラーとなり、映画化される。原作映画化の最初である。
- 1947(昭和22)年…6月、最初の新聞小説「青い山脈」を連載。終戦後の新しい生き方を求めていた日本人の共感を呼び、ベストセラーとなり、映画化。
- 1948(昭和23)年…1月、「石中先生行状記」を「小説新潮」に連載。
- 1949(昭和24)年…6月、『風俗』、7月、『わが日わが夢』を刊行。
- 1957(昭和32)年…3月、『白い橋』、11月『陽のあたる坂道』を刊行。
- 1966(昭和41)年…4月、『石坂洋次郎文庫』全20巻新潮社より刊行。8月、復刊した「三田文学」の三田文学会会長となる。11月、「健全な常識に立ち明快な作品を書きつづけた功績」により第10回菊池寛賞を受賞。
- 1967(昭和42)年…5月、直木賞選考委員となる。
- 1971(昭和46)年…8月、妻うら死去。11月、「亡き妻うらを偲ぶ」を「小説新潮」に発表。
- 1972(昭和47)年…2月、『石坂洋次郎短編全集』全3巻講談社より刊行。
- 1986(昭和61)年…10月7日死去。享年86歳。多摩霊園に埋葬。11月8日、弘前市新寺町貞昌寺で分骨法要。